

腕

十一時前頃、ひどい吹き降りだった。間もなくそれが過ぎると雨が切れて晴れ上がった。朝から多少の風も加わって、降ったり照ったりして二百十日らしい慌ただしい天気だったが、これでそれも収まったらしかたなかった。しかし何しろ陽が出ると雨上がりの蒸し暑さが息苦しい程身にこたえてきた。

お峯は髪を結ってしまふと、眼を見張って一寸口を固くむすぶようにして斜めに鏡をのぞいた。手で髪を後から押さえて見た。髪はただ後で丸めただけだった。後から押さえると自然に鬢びんが出た。少しは年とったかしらと思ったりそれほどでもないと思ったりしているうちに何時の間にかこんな髪が似合うようになった。白粉気のない顔だった。三年前に襟化粧えりげしやうを止めてから顔も何時とはなしに止めてしまった。額も広くなった。若い頃は富士額で眉も濃く水々としていて、賑やかだったが、そういう影はなくなってしまった。

しかしお峯はそう思うだけで、悲しいと言ったような気持にはまだならなかった。まだ目立つような皺は一つもなかった。十年以上も一緒に暮らしてきた夫であるが、晩酌をやりながらお峯を眺める夫は、まだ決して淋しい目付きをしなかった。そう言えば顔全体がゆったりとして、のびのびした落着きをもっていて、それが一種の魅力ともなっていた。しかし、これは子供のいる女の年相応の諦めに似た満足だったかも知れない。

お峯は落ちた髪の毛を丸めて、手を拭いた紙と一緒に紙屑籠に入れた。汗ばんできた顔を手拭掛にあつた濡れた手拭で拭くと、浴衣の襟をはだけて団扇で風を入れた。

茶箆筒の上に茶筒のような恰好をした煎餅の入れ物がのっているのが見えた。さつき大森にいる叔母のおひさが訪ねて来た。煎餅は田舎からの土産だった。おひさはお峯の母親が、七十近くになりながらまだピンピンしていて、相変わらず婿夫婦に口やかましく指図

している話をした。あれじゃあ憎まれるよ、とおひさは言った。お峯はもう四、五年も田舎へ帰らない。ただ時たま手紙をやるきりだった。名物の煎餅をみると、田舎のことが思い出された。田舎でも夏はやっぱり暑かったが、東京のように家の奥まで居たたまらないほど暑くなることはなかった。涼しい木蔭が田舎の家の庭続きにあった。夜が明ける頃から日の暮れるまで、一日中蝉が雨のように鳴き立てていた。裏の瀬戸に大きな梅の木があって毎年梅の実が二斗近く獲れた。梅を漬ける時、紫蘇の葉で紅く色付けをした。母親がよく、陽のカンカンあたる庭で菹よしずの上に真つ赤な梅を広げて干していた。庭から吹いてくる暑い風と共に酸っぱい香がした。

お峯はおひさから色々田舎のことを聞きたかった。お昼にはおひさの好きな冷麦をご馳走しようと思った。しかしおひさは向島にいる誰とかをこれから訪ねるのだと言って、そくさと出て行った。出て行って半町も行ったかと思う頃、切れたと思った雨がまたザーとやって来た。叔母は確か傘は持っていたが、まるで降られるためにこの家を出たようなものだった。

おひさが来たために朝の仕事が中途半端になってしまっって手を抜いたので、お峯はかえって退屈した。洗濯も少しあったが今からやる気にはなれなかった。もうじきにお昼だった。お峯はぐったりと座ったまま隣座敷にいる子供の浩二の後姿をぼんやり眺めた。

浩二は玩具の汽車をいじっていた。彼は今日は天気が悪かったので朝からずっと家にいた。汽車は先達せんだつての夜、父親と一緒に浅草へ行って買って来た。出掛ける時は元気で出掛けて行ったが、帰って来た時は正体もなく眠りこけていた。父親の要作は少し赤い顔をしていて、掛け声をかけながら座敷へ浩二を下した。それでも浩二は眼をさまさなかった。

お峯が蚊帳の中へ浩二を寝かせて出てきて見ると、要作は包みをといて買ってきたものを広げていた。かる焼きの一袋と、お峯が欲しいと言っていた櫛とそれから玩具の汽車がころげ出た。ぜんまいもなにもない機関車に客車や貨物車が五つばかりあった。要作は汽車をみんな繋いで畳の上に並べて眺めながらニコニコした。彼の赤く酔って筋の立った額は電灯の光でテラテラした。

浩二は客車を足の先に転がしておいて、機関車をもってしきりに何かやっていた。浩二は数え年五つだった。その年の割に小さい姿を見てみると、お峯はこの子はやつぱり夫よりも自分に似ているのだと思った。そのために一層可愛くもあつたが、頑丈な夫に似ないで、どつちかと言うとあまり丈夫でない自分に似たのは気がかりであつた。

お峯は台所へ立った。薬缶やかんをガスにかけた。青い火が勢いよく立った。ガスの燃える音は今までの眠いようなぼんやりした気持ちを払ってくれた。お峯は漬物の蓋をあけた。

お峯がチャブ台を直して、茶碗を並べると、浩二は汽車を放り出してやって来た。急に腹の減つたのを思い出したようだった。塩鮭を焼いた煙が座敷の中に流れた。それは暑い日中の昼飯時の香りだった。チャブ台には今焼いた塩鮭と今朝食べた余りの鰯の味醂干しが皿の上ののった。刻んだ出したての茄子の漬物がいい色をして小皿に並んでいた。

母子は膳を中にして向かい合つて食べ出した。そう言えば、昔はお峯はお昼を食べないのが習慣だった。要作が勤めに出る日は、菓子を少しつまむぐらいで過ごした。支度が面倒くさいのと、一人ぼつねんと食べるご飯の味気なさと、それからあまり仕事もないお峯はそれほど空腹にもならなかった。こうしてお昼をきちんと食べるようになったのも、浩二が大きくなって一人でご飯を食べ始めてからであつた。また子供の世話だけでもお峯に

は仕事があつた。それで気のせいかな前よりも丈夫になつたように思えた。お昼が結構頂けるのであつた。子供にはただ可愛いばかりでなく、親の生活をも自然と直して行くところがあつた。お峯も時々そういうことに気がついて、変に生真面目に子供というものは有難いものだと思つたりした。

表通りの先に共同井戸があつて、向こう側の家の人々が何時もやかましく洗濯したり饒舌しゃべつたりしているのだが、それも飯時になつたせいかひっそりしてしまつた。

四辺は急に静かになつた。蟬一つ鳴かない夏の町中の十二時は、夜のその時間に似た静けさ、まるで明るい真夜中といったようなものだった。時々母子が茶碗や箸をおく音がした。茶箆ちやべのよこの柱にかかつている柱時計も聴こえない様に静かに振り子を動かしていった。その柱時計はもうとうに十二時を打つて、十五分過ぎを指していた。この時計は何時ものことで十五分ばかり進ませであるのだった。

お峯が二杯目のお代わりをしようとして、飯櫃めしびつの蓋に手をかけた時、遠くの方から風が吹いてくるような音がしてきた。何心なく耳にとめて、手をとめたと思う間に、物音は急に近付いて、突然激しく膝の下から突き上げ乱打するように畳が上下した。家全体が恐ろしい痙攣けいれんをおこしたように震動した。

地震！ お峯は咄嗟とつさにどうするとか判断もつかず、思わず立とうとした立膝の姿勢のまま、真っ青になつて飯櫃の蓋を押さえた。浩二はチャブ台につかまって大きな眼をむいて母親を見た。左の頬に大きな飯の塊が食つ付いていた。

続いて横に大きく揺れ出した。頭の上の電灯が天井にぶつつかりそうに揺れ出した。箆筒の上の浩二の玩具箱と針箱が一緒になつて転がり落ちた。玩具が散乱した。座敷は波の

ように揺れて、柱や鴨居や壁などがうめき声を挙げてきしんだ。

普通ではなかった。何時もならもうこのくらいでおさまりそうなものなのに、益々大きく揺れて行つた。お峯は我に返つた。

「浩二！浩二！」

眼の前にいる子供がこれ程遠く思えたことはなかった。チャブ台を気違ひのようになつてはねのけて子供を抱きよせた。子供は怯えてしまったのか黙つて大きな眼をあけたまま母親に抱かれた。

お峯は子供を抱いて筆笥の前へ這つて寄つた。畳がゆらりゆらりと大きく揺れて、それだけの努力でも何だか夢を見てうなされていのように身体の自由がきかなかつた。東郷大將の額が彼女の傍へ落ちてもんどり打つた。彼女は浩二を自分の身体でかばうようにして、片腕で筆笥を支えた。彼女の転倒した頭にはそれ以上どう動こうとする分別も浮かんで来なかつた。ただ、早くこの恐ろしさの過ぎてくれればいと祈る気持ちと、どうしてこんな恐ろしさがこんなな何時までも続くのだらうと思ひながら、新しく湧き上ってくる恐怖にくり返しくり返し襲われた。

地震は益々激しくなつた。玄関へ出る敷居しきいの障子が辺りの騒然とした中に音もなく畳の上に倒れると、表が見えた。眼の前の路の上に黒いものが激しい勢いで飛んで来て、土くれを飛散させながらこなごなに砕けた。何処かで硝子のくだける乾いた鋭い音がする。鳥を殺す時のような叫び音がする。そのうちに近所で轟然たる音がしてもうもうと土煙が玄関の前を覆つた。

逃げなければ死ぬ！ それはこうしていることの愚かさに気が付いた反射的な判断だつ

たが、そう思う間もなくお峯の頭の上で物音がして、お峯の家の屋根瓦がどつと眼の前に落ちた。玄関の前へ落ちてつもつたらしい。土煙が玄関から座敷の中へ一杯になった。お峯はどうすることも出来なかった。

それから数分経った。家のきしみと戸外のごうごうと言う轟きの中に、心も足元も踏みしめることのできない動揺の、長い長い時間だった。

ようやく静まった。お峯は浩二を抱えるようにして瓦の山を踏み越えて表へ走り出た。街はまるで皮を剥がれたようなありさまになっていた。大部分の家の瓦が落ちていた。角の床屋が道路にのめって見るかげもなくつぶれていた。電線は切れて落ちて、切れていないのは、まださっきの恐怖から震えやまないかのように激しく揺れていた。二三軒先の綿屋は瓦一つ落ちないで、変に水々しい感じがする。その二階の屋根の頂辺りから落ちて来た小さい石のかけのような固いものが、弾んで飛びながら、静かになった周囲にチツチツチツと言う小さな鋭い音をはつきりと響かせながら落ちた。

その次の瞬間には、一斉に家の中から飛び出した人で街は一杯になっていた。さっきの一瞬の静かさは人々の口々に罵り騒ぐ声、叫ぶ声、泣く声でたちまち騒然とした巷に変わった。床屋の女房が血だらけの額をして駆けてきて、何か喚いている。十人ばかりが倒れた床屋の方へ駆けて行った。床屋には亭主の他に娘が一人と弟子が一人いる筈だった。駆けつけた人々は蟻がとりついたように家の一部を起そうとした。

揺り返しがやってきた。固い大地がまるで布団か何かのように揺れて動いた。大地から上る轟きは荒れ狂う海の波の音のように空に響きわたって、また新しく土煙が一面に上り、空に平常には見られないような一種の奥行を作った。街の人々は抱き合ったり膝をついた

りしながら道の真中に固まった。

小路の両側にある酒屋の二階家と質屋の倉とはまるで頭をつき合っているかのよう揺れた。木造の家がこれ程地震に耐えるとは思議なくらいだった。電柱は激しく動いて、残っている電線を千切ってしまいそうにブンブンとゆすった。

そのうちに綿屋の二階がだんだんと前へせり出してきて、その前にいた人々が叫び声をあげて逃げ出したあとの道の上へ一階がおしつぶされると、二階も勢いあまってその先へつぶれて、その崩れ落ちる地響と共にすさまじい土煙があたり一面に濛々と広がり立ち上がった。眼も口もあけられないほどの土煙だった。

しばらくしてやっと地震が静まり土煙も静まって行つた。綿屋は屋根ばかりが原形を残していた。その屋根にどういつもりか何時の間にか這い上がったと見えて、一人の男が棟に跨って土埃を浴びた真つ白な姿でまじまじとしていた。

二三町向こうから黒い煙が立ち昇っていた。土煙とはまるで違う色をしている。地震の連続から不安におのくれている人々の胸には、それが火事であることはすぐ判つた。路上の人々はたちまち右往左往し、家財を運び出し始めた。

お峯は浩二を道において、家の中へ飛び込んだ。入ったばかりは慌ててただうろろと二間の座敷を往来した。気がついて先ず風呂敷をだした。箆笥をあけて手当たり次第の着物を出して包んだ。持つて行くと云えば家中のものを持つて行きたい。持てるだけを持つて行くとしてもあれこれと選ぶ余裕はない。この地震に火事が起きているのだからどんな恐ろしいことになるかも知れないし、あとの地震は何時やってくるか判らないし、腹の下からわくわくするように慌てふためいた痙攣がおきてきて、手足がふるえて何をどう包ん



だか覚えていられるこの騒ぎではなかった。夢中で包みを背負って玄関へ下りて下駄を突っかけた。浩二の下駄もいると流石に気付いて下駄箱から出した。玄関を出ようとして、再び慌てて座敷へ戻った。箆笥の引き出しの底から預金通帳を出して帯へはさんだ。そして表へ走り出た。

もうその頃には避難の人々が駆けて行った。荷車に荷物を山と積んで駆けて行く者があった。怪我した男を背負って行く気丈な若い女がいた。小さい荷物を持って足早く行く老婆がいた。老人を背負った男と、その女房らしいのが布団を一枚持つてついて駆けて行った。荷車に寝具布団や籐椅子や三味線まで積込んで三人の女と男二人が引いて来た。そういう中に浴衣一枚で団扇を手にしたままで駆けて行く男がいた。漸くやって来る人々が街中に一杯になって来た。火は思ったより近かった。そればかりでなく一カ所ではなかった。東と南に二カ所も三カ所も火の手があがっていた。

角の床屋の倒れた家に取り付いていた人々は、何時の間にか見えなくなっていた。あとに女房が一人になって、泣きながら大地に伏さった軒を持ち上げようとしたり、屋根の瓦をめくって見たり、無駄な努力をしていた。もう誰一人手を貸すものはなくなっていた。しまいには女房は突立ったまま顔中を涙だらけにして子供のよう泣いているばかりだった。避難する人々の流れは引っ切りなしに騒然と続いて、町角に泣いている女房などは五月蠅うるさそうに突き飛ばして行った。追われるようにせき立てられた人々の口々に喚きながら血眼になった姿が後から後からと押し寄せた。

お峯もその人の流れの中へ浩二の手をひいて入った。前には箆笥と夜具を積んだ車が走っていた。お峯もそれに続いて駆けた。時々浩二の両脇へ手を入れて宙に吊るようにし

て子供を走らせた。ともすると転びそうになった。道には落ちた瓦や、逃げて行く人々が落した箱や座布団や屏風や畳など思いがけないものが散らばっていて危なかった。前の車はそういうところを容赦なく走らせるので、いい加減にしばらくつけた箆筒は時々ひどく躍り上った。抽斗ひきだしが抜けて、何か玉のようなものが飛び散った。二人の男が車をひいていたが五十ばかりの男の方が気がついた。振り返りながら、

「アー」

といって車をとめようとしたが、とめて拾うわけには行かなかった。若い男の方はそんなことは知らずにムキになって引いていた。それに後から道一杯になって駆けてくる群衆は、もし拾うために止まったり屈んだりしようものなら、遠慮会釈もなく踏み倒して通りそうな勢いだった。

風が出たためか、火が迫って来る勢いは思い掛けない程早かった。今逃げて来た南の方からと、東の方からの火の手と、新しく北の方にもやや遠く火が出ていた。逃げる行手は西の方より他はなかった。この道を進んで行って、突当りを曲ってすぐ大通りを出て、その大通りをずっと行くと大川へ出られる。手前で一つ曲れば被服廠へいふくじやうへも行かれる。それは人々が無意識に向って行く方向であった。

前の車が何かにどんとぶつかつたようだったが、そのまま走ってゆくと、後から肥った男が血相変えて追いついて来た。その男は右手から車の梶棒を押えた。車はぐいと左向きになった。すぐ後ろにいたお峯は危くはねられそうにして身をかわした。肥った男は車をひいている若い男の方に掴みかかった。後ろの方を見ると、二三間後方に一人の女が俯伏うつぶせに倒れていた。お峯は浩二を脇に引き寄せながら車をよけて過ぎると、また駆け出した。

しばらく行くとお峯はのめりそうになった。また大地が揺れだした。波の上を踏むように、足が運べなくなつた。浩二を抱き寄せて、片膝をついて体を倒れないように支えた。左側に銀行のような建物があつた。丁度その前をよろよろと歩いて二人が、アツという間もなく倒れて来た石の柱と煉瓦の下敷になつた。血飛沫が火花のように散つた。道にいる人々は一斉に叫び声を挙げた。顔をそむける暇もない一瞬の出来事であつて、助けようもなかつた。大地は未だ揺れていて、地響の轟く中で、人々はただすくんでいるきりであつた。

地響がもう静まるなど判ると人々はまた動き出した。お峯も浩二を抱えるように脇につけてよろけながら歩いた。

通りの突当りに近くなるともう一杯の人で駆けては前へすすめなくなつた。突当りの丁字路では右手からも一杯の人が押し寄せていた。ここを左へ曲ると間もなく大通りへ出られるのだつた。丁字路の角は両方からの人がただひしめいているだけで前へ進みそうもなかつた。お峯も前を遮られ、後からも詰め寄せられて人波の中へ入ってしまった。

東の方の火の煙は大きな黒い壁のように空に立ち昇つた。南の方からは大きな雲がすぐ頭の上へ立ちふさがるかのようにこちらへ向つて来た。逃げて来た後方の街の方はただ黒く暗く、時々大地に近く火の立つのが見えた。そこから火の子が舞い立って来た。風も加わつて来た。

南の方の火の中で何処か大きな建物が焼け落ちたのか、鞆ふとで吹き上げるように火の子が激しく舞い立つた。その火の子の中から、紙のようにうすいものが、火がついたままヒラヒラと空へ昇つて行つて、真直ぐにこちらへ飛んで来た。そして通りに面した一軒の、平

家の瓦が落ちて裸になっている屋根へ落ちた。それは板塀の燃えたのだった。その上へその後からぼうぼうと燃えさかった塊が勢いすごく落ちて来て、燃えていた板塀と一緒に燃えて屋根に穴をあけて中へ落ちた。何の塊か、そういう燃え立ったものがその二三軒方向にも一つ落ちた。こちらの家はたちまち燃え立った。丁字路の角からは一町と離れていなかった。

後の火に近い方の人々は気も狂ったように喚き立てて後から丁字路の角へ向って押し立てて来た。その力は背中から背中を伝わって、恐ろしい圧力になって角の人波の中心へ行った。身動きも出来ないようにぎっしりと詰った人の頭が、絞り出すような叫びや悲鳴と共に揺れた。人が揺れるのであるか、大地が揺れるのであるか判らなかつた。お峯は浩二の手をひいていたが後を振り返ることも出来なかつた。

お峯の前の方にいる四、五人の男女がお題目を唱え出した。声を合わせてだんだん叫ぶような大きな声になった。そのお題目につれて動く後姿は、恐怖の戦慄を押える痙攣だった。時々、その中の背の高い中年の男が後を振り返って火の手を見た。彼の汗みどろになった顔と、恐怖に拡大している眼とは、後方で身動きも出来ず押し詰めている人々に、後の方の出来事の恐ろしさをそのまま鏡のように反射した。

飛火に燃えついた平屋の火は、隣の家の二階へそのまま真直ぐに吹きつけて、二階屋は間もなく前後から髭のように火を吹いた。

突然丁字路の左へ曲る道の方から一段と高い叫喚きょうかんと共に、人の波が押し返して来た。大通りに出る方に新しい火が出たのかも知れなかつた。角の中心では人力車の梶棒が高く上ってひっくり返りそうになった。人波に押し上げられて腕を振り回しながら真っ赤になつ

ている男がいた。車に押し付けられた人々の悲鳴や、人に踏みつけられて人波の下にならないようにもがいて叫ぶ声の中を、自由にならない荷物の車の間をぬう様に人の体が流れた。辺りの家は揺れていた。人々の騒ぎは地震でまた一層高くなつた。この有様では人々は荷物と共にお互いに訳もなく押し合つて、この町角に立ちすくんでいると同じだった。

お峯の前にシャツを着た男がいた。その男は頑丈な肩幅をして、お峯の亭主の後つきによく似ていた。お峯はこれを見ると、何だか不思議にホツとした。その安心は、ようやく探し求めていたものに巡り合い、これからはこれにすがり付いていさえすればいいという、夫に依頼することに馴れた女の無意識の気持だった。その男は先の方が気になるらしく伸び上つたり前を押ししたりして焦っていた。そのうちに彼は体を低くして渾身の力を出して前の背中を押し分けた。押されて倒れそうになつた三四人の男女から悲鳴や怒罵どばが起つた。彼は遮二無二押し進んだ。お峯は無意識にその後へ続いた。夫に似たその背中はお峯に人波の間へ溝を作つてくれた。男は死物狂いの勢いで角の人波の渦の中を突き進んで行った。お峯はその背中を失うまいとして必死に分け進んだ。

角へ来て左手の道を見ると、半町もない先に街を遮さへぎつた火が燃えていた。右手の道にはお峯がやって来た方の道にも劣らない程の人が押し詰めていた。しかしその人波はようやく後へ引き返し始めていた。

角で停滞していた渦は突然右へ崩れ流れた。お峯も、お峯が必死になつてとり付いている背中の中も弾みを食つたように右の方へ突き飛ばされた。後で受け止めるように荷車にぶつかった。荷車をひいている中年の夫婦は群衆が反対の方へ行くのに一緒にしろうとして、車の向きをかえようとしていた。それは容易ではなかつた。後ろ向きで走らそうにも

荷物で先が見えなかった。群衆がまるで両側の車にとり付いているように一杯で、後から引張るにしても梶棒から離れて後へ行くことも出来なかった。人々は動けない車に邪魔されて、怒って罵声を浴びせながらひしめいて車の側を過ぎた。車は車で、立往生しているわけには行かないので思い切って梶棒を回そうとした。しかし半分向き直ったまま身動きがとれなくなってしまった。反って人々の行く手を遮るような結果になった。回りの群衆は車を押ししながら口々に聞きとれないような大声でわめいた。夫婦はどうすることも出来ず梶棒を上げたまま呆然とした。一人の男が亭主の耳元で囁みつくように怒鳴った。

「荷物を捨てる、見やあがれ、しようがないじゃないか。」

亭主はあわてて梶棒を下した。女房は辺りの人を見廻しながら未だ少しぼんやりしていた。亭主は荷物をほどころとした。あり合わせの兵児帯で締めたらしく急いで解こうとしても解けなかった。お峯の前にいる男は怒って、前を遮っている車の後を力まかせに押した。車の上にいる亭主はそれはずみに転げ落ちた。男は車の尻を回って先へ進んだ。男のように思うように前へ出られなくてお峯はあわてた。その杖とも柱とも頼む背中が見る間に手が届かない遠くへ行くような気がした。お峯は遮二無二進もうとして、荷車の後の突き出した棒で脇腹を突かれた。その息のつけないような痛さを我慢して背中を見失うまいと掻き分けて進んだ。お峯の耳元で周囲の叫喚の中から、

「母あさん！母あさん！」

と叫ぶ女の声があった。その母親らしい姿が人の頭ごしに見えた。痩せた硬ばった顔に大きな眼が恐怖に青く光って、人波に体を揉まれ回転して後の方へ見えなくなってしまった。こちらの人の流れの方が早かったので娘と離れてしまったのだ。娘は人の流れに逆らって

引返そうとしているようだった。

煙はあたりへ薄く一面にたれこめて来て、焼ける臭で一杯になった。日暮のようにあたりは薄暗くなった。火の直ぐ風下にいる証拠だった。火の子の小さいのが落ちて来た。大きいのはむしろ頭の遙か上を越えて、行く手の向方へ飛んで行った。

お峯の前の男はお峯の方を振り返って、邪慳じやけんに腕を振った。お峯が無意識のうちにその男のバンドに手をかけていたからだだった。お峯はその肘で右の眼の下を突かれた。お峯は手を離れた。夢中で痛くはなかった。しかしお峯の胸の辺りは鼻血で真赤になった。彼女は鼻血が出たのをただ少し水っぽく思っただけだった。お峯はそれでもその背中から離れなかった。背中にくっついて足を動かしていれば自然と他の人を追い越していた。

男は何時の間にか道の左側に来ていた。左側の大きな二階屋の間に細い抜路のような間があつて狭い木戸があつた。男はこの木戸を開けてはいった。お峯も無意識に続いた。暗い二尺ばかりの家の間を一曲りして走り抜けると、裏通りへ出た。一間幅ぐらいの道の曲り角だった。ここには人影一つ見えなかった。男はこの通りへでると真直ぐに瓦や土を跳ね越え韋駄天いだてんのような勢いで走り出した。お峯の鼻血を赤くつけた背中は見る見る遠ざかって行った。

お峯はハツとして思わず足を止めた。この背中が他人であつたことに今更のように気づいた。お峯はそこに立止つたまま小さくなって行く背中を呆然と見送った。支えるものを急に抜かれた、それは頭から血の引いてゆくような瞬間だった。お峯は水の中で溺れるような眼付をして顔を空に向けて、死の町のガランとした家々を見廻した。その時お峯は右手に何か握っていた。変に軽かった。この軽いものは何だつたらうか。考えようとす

ると、お峯は不意に頭がぼんやりしてきた。考えようとするとその先にあるものはお峯の頭ではまるで背負い切れないように重そうだった。それに正面からぶっつかれない弱さが本能的に恐ろしさから顔をのけ反らせていた。しかも一方ではこのぼんやりした頭で必死になって何が起ったものか考えようとしているのであった。

お峯の考えがその恐ろしいものによく定まり付いた時、突然全身が打たれたように硬直した。それから異様に見開いた眼がそろそろと右手の方へ動いて行った。

握っているのは子供の腕だった。腕だけだった。腕は肩の付根からもぎ取れていた。血はもうたれてはいなかった。血のついた肩の皮が、風呂敷の端のように垂れ下がっていた。お峯の握っている先には小さな手が紙のように蒼ざめて五指を一杯に開いていた。腕から上につながっている筈の体は幻にも見えなかった。切れた先から直接にあの世へつながっているのか、この小さな腕はあの世からの思いを込めて何物かを求めているようであった。

お峯は一瞬間口を開けて飛び出すような眼付で凝然とした。そして口と眼が一層大きく開けはだかつて顔がやぶれるように歪んだかと思うと、全身の恐怖と驚愕とを肺腑と共に絞り上げるような恐ろしい叫び声を挙げた。

お峯は気を失い、崩れる様に倒れこんだ。

それから間もなく薄い煙がお峯の倒れている上に差して来た。そしてだんだん煙が黒く濃くなって来た。やがて轟轟という火の手が時々爆発するような激しい音を交えて迫って来た。二時間前の静寂と平和を最後まで叩きつぶしにやって来た。それを頼りに生きて来た人間を塵のように吹き飛ばして、破壊の最後の仕上げをするように、暴れ狂って押し寄



せて来た。

【日本小説代表作全集（小山書店）第六卷 昭和十五年】

5 頁 地震……

1923年大正12年9月1日午前11時58分、神奈川県西部松田付近を震源とするマグニチュード7、9の地震があり、関東大震災と呼ばれている。この地震による死者は10万5385人、その中で火災による死者が9万1781人であった。地震発生5分後に発生した津波は熱海で12メートルを記録しているのを始め、神奈川県から千葉県（房総半島）南部にまでたっし、土石流や津波の被害も大きかったが、東京市の火災による死者が余りに多いことから、東京の惨事が多く語り継がれている。

10 頁 被服廠……

軍帽軍服など兵隊の身の回り品を製造調達保管する機関。1919年大正8年に赤羽へ移転した跡（被服廠跡）は樹木も殆どない2万坪（約6万6千平方メートル）の空き地で、東京市が一部を公園として整備し、残りは学校などにする計画が進められていた。

被服廠跡は現在のJR両国駅の北側で、江戸東京博物館や国技館の一部から横綱町公園までの地域となっている。横綱町公園には復興記念館、東京都慰霊堂などがある。